

四季の道

深谷孝夫

台風一過つかのまの清々しい青空
金木犀の甘いかおりが漂う四季の道
自然の息吹にふれ自分を振り返る道
そこは織田信長の息子信孝がいた
神戸城址へと続く歴史散策への道
天正時代豊臣秀吉と敵対し
追われに追われて哀れな最後を遂げた
青年期信孝の生涯に想いを馳せて
熱くなつた身体に健康を感じて歩く

道の傍らで日焼けした顔色のおばさんが
風のいたずらで道の隅に
吹き寄せられた枯葉
幾星霜過ごした人生を
重ね合わせるように掻き集め
道におばさんの心が映っている

そこを通るわたしは
いたずらをした風に
ありがどうのことばの伝言を頼むと

さわさわと葉擦れの音を響かせて
おばさんの耳に届く
すると曲がりかけた腰が伸びて
一瞬少女のようににっこり笑って
手を振ってくれるおばさんのからだは
老いを寄せつけず
いつもピンピンコロリンを胸に秘め
黙々と自分の分身の枯葉を片付ける
それを袋に詰めて
樹木再生の肥やしにし
ゆたかな土壌づくりで
四季の道に季節折々の花が咲く
おばさんの心にも花が咲く